

二〇二二年(令和四年)十一月一日發行(毎月一回一日發行)

香蘭

第九十九卷第十一号

村野次郎創刊

香蘭



2022年(令和4年)11月号

第99卷

第11号

通卷1103号



香蘭

2022年(令和4年)11月号
第99巻 第11号 通巻1103号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌 (87)

千々和 久幸 表二

二

推薦香蘭集

香 蘭 集

三

作品一 特選 (九月号) 飯島・伊藤(美)・工藤・白井・鈴木(桂)・谷本・坪・長野・中村(か)・本田・宮原・

坪・長野・中村(か)・本田・宮原・

作品二、三 特選 (九月号) 江口・庄司・沙阿羅・杉山(伊)・竹本・田中・

竹本・田中・

一頁公論 (18) 俊寛と有王 村野次郎への旅 (151) 千々和 久幸 江房

江房・千々和 久幸

七首抄 (九月号) 水谷・三澤・藤田・千川

藤田・千川

私の読む現代短歌 (16) 「長き家系の末」の富小路禎子 工ッセイ・自由研究

伊藤美恵子・阿部容子・田中あさひ

作品一 評 (九月号) 戰争詠 万葉集の花

和田羊子・八木橋洋子

作品二

丸山三枝子

作品三 香蘭集

川久保百子・柳沼・市川

緑地帶 耳言あれこれ (12) 明宝研究会第一三回八月例会 永田 紅の歌を読む

田中あさひ

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向 令和5年香蘭新年本社歌会参加申込書

みどり

「香蘭基金」御礼 歌会及び会合・会員消息・他 編集後記・新宿日記

表紙絵 中村陽子「浮遊」 目次・緑地帶カット 和田

令和5年香蘭新年本社歌会のご案内

表三 77 73 72 69 66 58 56 54 52 50 48 46 44 42 40 39 18 13 16

千々和 久 幸

村野次郎作品 私の愛誦歌（87）

はなやかに宴会終り酒のめぬ
われのみ腹をすかして帰る

抄出歌は、『村野次郎歌集』昭和三十六年（1961）の「家族」一連七首の最後にある。いかにもありそな歌だが、わたしは当初からこの歌の内容には異見がある。だが先生の心やさしいユーモアの見える歌として、愛惜措く能わざる一首である。

『村野次郎歌集』

宴会には酒の飲めない客が一人や二人混じっているのが常。片や飲兵衛は食べるより飲むことに忙しく、つい箸をつけないままの料理が残る。そんな時、近くに飲めない仲間がいると二ノマリして自分の料理を皿ごと回す。こんなお節介もまた宴会でのご愛嬌、だから下戸が腹を空かすなどとは考え難い。

大岡信はこの歌を「折々のうた」で「ご同情にたえない」と書いたが、飲兵衛の大岡がその辺の呼吸を知らぬ筈はあるまい。

一首の事実はどうあれ、先生の律儀な人柄が偲ばれ、微苦笑を禁じ得ない。

（『村野次郎歌集』111頁、『村野次郎三百首』87頁に掲載）

四選者 の 作品

黄昏には泡盛を 平 塚 千々和 久 幸

ウイリアム・テルなど思い三日月を仰ぎ最終便のバス待つ

上弦の月を眺めて上機嫌こよいの死者はみな他人にて

黄昏はコーヒーよりも泡盛が似合う虚ろな時の間をきて

時間まだたっぷりあるかもうないか燃え尽きるまで其処に立ちていよ

連絡のまつたく絶えし日の背後とほけた顔して黄昏のくる

用もなく街に出で来て用もなきコーヒーを飲む敬老の日か今日

ひつじ雲きり雲わた雲もつれ雲あま雲うね雲またしまい雲

妻の名を呼ぶことも無く日の過ぎて百日紅のいつか散りたる

一筋の道 鎌倉 香山 静子

外出のかなはぬ日々をわが庭の蝶の飛来にしばし癒さる

「明日がある明日がある」と唱ひつつ今日の私を駆り立ててゐる

籠もりゐるわれを慰め呟るるもの庭に来て鳴く小鳥らの声

久々に佇つた花終へし枝を飾れるこの店の女^{あそび}主に心温^{ほおひる}もる

籠もりゐしこの数日に政局の変動ありて驚くばかり

忙しさに疎かにしてゐし日常か籠もりて目につくあれもこれもが
寝てゐてもわれには短歌とふ一筋の道あり確かに光るその道

自由研究 我孫子 丸山 三枝子

人間も自然もどこかおかしいと添え書きにあり文字うつくしく

老犬はソファーの端にうずくまり一度名を呼ばれ尾の先を振る

四回目ワクチン接種うけし夜の夢に梯子を昇りていたる

天涯のあしたの空にたつた今生れたるような白雲ふたつ

つきぬけて底のあかるき朝空へヘンリーブルーキー上りゆく

夏休みの自由研究 少年の《俳句と短歌で綴る愛犬集》

十日間犬とくらして仕上げたる自由研究背負いて帰る

バス停にバス待つ神父、修道女、わたしとならぶバスは來らずきた

サフランモドキ 東京 桜井京子

涼やかにサフランモドキの咲く処もどきはもどきなりのよろしさ

コーヒーを買つてきますと街に出てつひに戻らぬ同僚がある

蚯蚓だつて日向ぼっこがしたいのにミエさんになたく嫌はれてゐる

ありふれたあぢさゐ通りといふ通り夏の蚯蚓がたくさん死んで

夏の日の舗装路のうへに夥しき死が散乱す蚯蚓なれども

永遠にやまない雨があるやうに待たれてゐたりブーチンの死は

あぢさゐの雨がやむとき死んでゐる場合ではないと気がつく蚯蚓

生き方も死に方もだいじ干からびてたぶん私は夏に死なむよ

作品一特選



(九月号作品から)

桜井京子選

われの生まれ子

川崎 飯島智恵子

チヤイム鳴り運びこまれたダンボール箱歌集四十冊入りの八個が届く
上がり口に積まれた箱にわが歌集『草木瓜の咲く家』にはつとひと息
とり出した歌集はわれの生まれ子と手のひらに乗す 意外に軽し
登喜さんに先ず電話する盛り上がる二人の会話止めようもなし
一区切りついたような安堵感残る余生は気楽に行こう

・自歌集を手にその喜びを手放しで歌つてみせたところがよい。

すいすいと

川崎伊藤美恵子

もうこれを最後にしよう山の家車にゆられて夫は疲れて

里山の初夏の稻田に足すえて虹ふとぶと半弧を描く

デイサービスに夫のゆきたる畳下がりすべての音が静かさを持つ
街の灯を見下ろすデイナーに年老いた一人が祝う結婚記念日
どこへでも車椅子押してすいすいと行くよあなたが乗つてくれるなら
・残り時間を悔いなく生きようとする夫との日々が愛おしい。

人には見えず

東京工藤溪子

墓に眠る夫の時間を世に生きて白寿とうなじまぬ祝い日近し
百の字の一本とりて白とする人の作りし虚しき祝い

八センチ縮みしわが身いとしかり裡にあまたの秘めごと抱き
「自分らが楽しむため」と友ら言い生日の席にほろ酔いいたり
「幸せですね」言われてみればそなのか裡なる煩い人には見えず
・白寿を迎えた悲喜交々の感懷が率直でよい。一滴の毒が冴えて。

大毛蓼

川崎白井絹子

おけたで
大毛蓼生え来たれば抜かずおく庭一番の背高のつば
ボケットにありし歌くず夜の卓に広げて一首成さんとすなり
ダンボールで堆肥作りを始めたり主役は生ゴミ日ごと欠かぬ
生きおれば日毎に溜まる生のゴミ地球に良いことまだ出来そうで
グラジオラスの花のさかりに逝きし夫ごとしも咲かず七夕の後

・四首目、市井の片隅から地球規模に想像を広げた力量の確かさ。

母

西宮鈴木桂子

人の言葉鳥獸の言葉水の言葉木の言葉なべて戦火に揺らぐ
母を妣と書いてしまつたら母はもう私の母ではないやうな母
固定してひたすら骨の出来るのを待ちて一月 ギアスをはづす
サヨナラを何度も言ひて人生がまだありさうな一〇〇年時代
街中のゴミ集積所の片すみにながみひなげしボツンと咲いて

・四首目、別れを言う度にさびしみ人生一〇〇年とは長過ぎる。

ブーチンの顔

神奈川 谷本朝江

夜明け

福岡中村かよ子

雨戸繰る手に止まりたる迷い蝶放てば空に吸われてゆけり
八日ほど梅雨入り早きこの年の庭に咲きだす忘れな草は
侵攻もコロナも知らずこの庭に濃きむらさきの紫陽花の笑む
縁のなき事にはあれど新聞にロックの日とあり六月九日
チャンネルを変えても変えても現れる侵攻の元凶ブーチンの顔
・五首目、ブーチンの一方的に始めた侵略戦争が腹立たしい。

そうかお前も

東京坪裕

ヘルパーさん

長崎本田民子

青嵐に若葉すべてが張り反り返るとき反射がまぶし
白い蝶が地上に静かに降りてきて著我は日陰に群れて咲きます
せわしなく日々の過ぎゆき柿の木は白き小花を零し続ける
春過ぎて夏の来たるに今を咲く残滓の如く赤いシクラメン
壁走る我が物顔の夜の蜘蛛そうかお前も住人だつたか
・五首目、夜の蜘蛛は殺せと言うが同じ家の住人は殺せない。

ひまわり

横浜長野道子

雨明けの月

倉敷宮原迪恵

ひまわりのようなる友が泣きいたりひまわりだから涙も大粒
くちなしの花は見えねど匂いして六月の雨は五感を震わす
発芽せぬひまわりの鉢に声かけてあなたの都合を知りたかったな
八粒のひまわりの種をまきたるにたつた一つが双葉となりぬ
今年また月下美人の花咲かすネイルサロンの入口の前
・身辺に咲く花と対話しながら日々の暮らしに彩を与えている。

熟れてゆく葡萄のような色になる夜明けが近い硝子の外は
犬がまず光を感じ身を起こす夜明けはかすかな大気のリズム
とりあえず夜は終った生きてゆくりズムを刻もう昨日はもうない
図書館に眠る子よ本に突つ伏して夢にしかない夢をさがして
君が持つ熱を感じるこの距離がどうしようもない境界線だ
・三首目、眠れても眠れなくても朝は来るから昨日の事は忘れよう。

ヘルパーさん

福岡中村かよ子

週一度来るヘルパーさん手際よく掃除とおしゃべりして帰りゆく
入退院繰り返しおればロッカーの冬のコートがご機嫌斜め
冬コート使用せぬまま春も過ぎ初夏の日射しに晒されている
水茄子の季節になれば思い出す大阪大会城富貴美さん
橋したに黒く沸き立つひとところボラの稚魚らが群れているらし
・四首目、コロナ禍の今、会員が一堂に会した全国大会が懐かしい。

こんなにも軽い人生だったのかカツップラーメンうましと食べて
おおよそは百歳までの人生か紫陽花の花の七色變化
訪い来しは誰と目覚めて雨に問うあいたき人の今日あたり来ん
神よりもみ仏よりも先の世にあるのか朝の雨明けの月
みずからを犬と思わぬ犬がいてわれは老いても女と思う
・長生きをすれば見えて来るものがあり、どの歌も味わい深い。

作品一、三特選



朝雨に花糸はぬれいてねぶの木は淡紅色に満ちておりたり
・対象をよく見て具体に添つて詠み、さりげない詩情を漂わせる。

(九月号作品から)

渡辺 札比子 選

過ぎて行く日々

相模原

沙阿 羅

〈作品二〉

遠野の墓

柏 江口絹代

「明けがらす」とう名菓のありて遠野には鴉一族が物見山に住む
ごめんなさい、あなたが逝つてもう一年「明けがらす」を今とても食へたい
亡き夫の生家はどうに消え失せて祖父母の墓のありどの知れず
まんづまんづよく來たじやと手を揉んで夫を迎えしか黄泉の父母
遠野には春は名のみの雪野原に父母の墓ありふきのとう出づ
ななふしが秋明菊の葉の上に動かずおれば我も動かず
・遠野での体験は悉く亡夫への思いに繋がる。四句の方言が温かい。

ひるがお

横浜 庄司健造

空の青降つてきたがの澄みやかな額紫陽花の咲く水辺行く
早苗田の畔にひるがお伸びてゆく二つ三つ四つ花の咲きおり
朝霧の零をまとい枇杷の実の色深まりて梅雨に入りゆく
梅雨晴れの紋白蝶はたわむれて即かず離れず川わたりくる
真夏日のホームに熱気を巻きあげて快速電車は通過してゆく

・自らの原点を見据えて詠む。記憶力の良さは歌人の強力な助つ人。

美魔女

千葉竹本幸子

そのうちにアナウンサーも消えゆかん自動音声に違和感あらず
A Iの音声ニュース聞きおれば完璧なれどスリルが足らぬ
研修の希望あふるる若者に余計なことは言わないでおく
ひと月の研修終えてそれぞれが次の研修先へ向かいぬ

シトラスの香りふりまき闊歩する美魔女は今日もピンヒールにて
・時流に敏感に反応して詠む。一首目、作者独自の視点が興味深い。

はつなつの風

取 手 田 中 あさひ

くびすぢを撫でたるのみに過ぎてゆくはつなつの風その名は時間
とどめがたきものひきつれて去るものよ目には見えないはつなつの風
さびしがるきみたちだなんて知らなくてだから放つておいた二十年も
われはけふ三かぶのユキノシタを買ひきみたちのゐたところに植ゑよう
庭隅に生きて増えてゐるユキノシタ今年は白い花も咲かせて
これからはずっと一緒にゐるからねさびしがらせたりしないから
・日本語の魅力を知り尽くした自在な詠みぶりに魅了される。

シャボンの香り

東 京 中 村 陽 子

風呂場からシャボンの香りただよいて久方ぶりに家に娘がいる
何思い縄文人は生きたるかみみずく土偶の顔のイレズミ
墨をすり裡なる宇宙を描きたる篠田桃紅の無限なる黒
身の裡を見つめ尽くし線ならん篠田桃紅の迷いなき線
定型に收めようとして溢れ出す言葉がブツブツぶつかつてている
・観覚で物を捉えることに習熟している作者の豊かな世界。

右側にある

我孫子 脇 谷 房 子

北風の中ゆうゆうと飛びて来て杭にはつしと止まるダイサギ
つながれて風船揺れる大空をマシンのペダルふみつつ見て
いっせいに丘に上がりついばみてオオバンたちは遠くにゆけり
蜘蛛の巣に光あつめて雨粒のゆらゆら揺れる美しい午後

モスグリーンの母のコートが捨てられず洋服箪笥の右側にある
・自然觀察の眼が行き届いている。五首目の結句は余情が深い。

〈作品三〉

「漂 白」

鎌 倉 小 笹 岐 美子

「身を捨つる程の国」かもしだれないがキーウに行く夫止めたし妻は
大河ドラマ我が世代には不評なり菊五郎の義経懐かしむ声
風呂場までカーブサヨナラ負けしたと報告しに来る夫は巨人ファン
「漂泊の歌人」を「漂白」と誤植する新聞記者よ方代が笑う
・批判精神旺盛な作者。パンチの効いた諧謔が効果をあげている。

兩の匂ひ

島 根 澤 田 久美子

梅雨寒の朝かさねるセーターは君の好みし紫陽花の青
どの花となく零する紫陽花の毬は隣のフエンスを越えぬ
古き歌集いま繙かむ降るでなく晴るるでもなき梅雨の一日よ
古書店は雨の匂ひす 夏至近く鈍き日差しのなかを来たれば
考へは二転三転 みなづきの夜の静けさのなかを浮遊す
・季節感を巧に掬つた。とりわけ四首目の感覚的な捉え方がいい

ひまわりの国

愛 知 三 神 進

映像は煉瓦が抜けたビルの壁母子が手を引き横切る後に
安らかにみどり子眠る母の胸その背は冷たきシェルターの壁
青い眼に映る菜花と白い雲幼児に見せてはならぬミサイル
砲弾の飛ばぬ長閑な町なれど祭り囃子を阻むコロナ禍
・「すらし」の技法で詠まれた反戦歌。強い思いが伝わる。

村野次郎への旅（151）

大正期の「香蘭」（十二）

千々和 久 幸

らばすがかかるべし

青葉の頃一連は、内容的に格別のことが詠
われている訳ではないが、事実に即して手堅
く描写されている。こういう地味な歌も、デッ
サンの基礎を身につけるためには、疎かにし
てはなるまい。

歌)に二十四名、そして六號雜記、編輯後記
となつてゐる。
表紙繪及び題字は北原白秋で総頁60頁で
あつた。奥付その他は前号と異同はない。
さて卷頭の村野次郎「青葉の頃」六首から
読んでいこう。

青葉の頃

忠、石野正太郎、島田旭彦、本間栄寛、冬野
木枯、南草萌、柿谷伸、橋本敏夫、酒井廣治、
杉浦翠子である。

このうち村野次郎は別格として冬野木枯(清
張)、石野正太郎は後に選者となり、わたしも
親しく指導を受けた。

ついでに一通り目次を見ておけば、卷頭の

短歌欄の後に杉浦翠子のエッセイ「眞劍味」、

次いで短歌欄には南部松若丸以下十名、前月
歌壇合評、水無月集(短歌)に十三名、南部
松若丸「寫生論」、初夏集(短歌)に十四名、
本間樂寛「香蘭の歩み來し道」、青嵐集(短

短歌は一首独立^{立派}が基本だから、相乗効果を
あてにしたような一連の読み方は、邪道と言
われることは承知の上である。作者の意図に
関わりなく、序歌的な詠い口が薄味となるこ
とは致し方あるまい。

この歌、一首のアクセント(面白味)は下
句にあって、稻妻が重しになつてゐる。
②の歌、①の歌を内側の動きを中心にして詠め
ばこうなろう。気になるのは「室」、なぜ部屋
ではなくてわざわざ「室」なのか。村野先生
は平易平明、言葉については街いを嫌い、最
も素朴な使い方をされたから(故郷は古里だつ

- ①夜にいりて暴風雨となれり吹きしなふ青葉
にひかるちかき稻妻
- ②暴風雨來りそぎて閉むる雨戸より稻妻ひ
かる室のくらきに
- ③朝庭のあらしのなごりちぎれたる青葉ここ
だく土につきたる
- ④くつろぎて夕餉にむかふ窓先の青葉にうつ
るともしげのいろ
- ⑤歩み來れば青葉そよがす夕風のすがしきか
もよ帽子をとりて
- ⑥やはらかに杉菜もえたり朝雨のこまかに降
あさあめ

た、気になつたのだ。

辞書は「室」は「①さしき。へや。居間」だがネットで検索すると、「部屋は単独で使うが、室は造語の要素として使う」とあった。つまり「部屋」はそのまま使えるが、「室」は「満室」「会議室」のように使うとある。真偽のはどは定かではない。ま、話のタネくらいにはなろうか。

③の歌、四句の「ここだく」は「幾許」で「上代語」。これほど数多く、これほど甚だしく（旺文社古語辞典）の意。

一首は細部に目が届いているようだが、全体の経緯に目配りしながら概括的に詠まれたもので、やはりわたしには薄味の歌だった。

④の歌、引っかかったのは結句の「ともしひ」。『山小屋の灯火』「風前の灯火」は周知だが、「ともしひ」は漠然と広範囲に使われ、場によつてイメージが変わつてくる。わたしは反射的に、昭和天皇の御歌「…こたへてわれもともしひをふる」を思い出したのだった。昭和天皇は新年の歌会始に「ともしひ」という題のもとに、次のような歌を発表されたのだつた。

・港まつり光かがやく夜の船にこたへてわれ

もともしひをふる（昭和32年）

凡そ歌会始に興味のないわたしだが、何故かこの一首（それも下句）だけは鮮明に記憶にあつた。流石に上句は忘れていたが、このたび宮内庁に問い合わせて、ようやく上下句が繋がつたのだった。

このともしひならよく解る。しかし村野先生が大正十五年に見た「ともしひ」は電気だったのか、はたまたガス灯だったのかなどと往時の風俗を思つたのだった。

日本で最初に電灯が灯つたのは明治11年（1878）だから、村野家はとつくに電気が主要光源の筈だつた。しかし歌人は今日でも「灯火」を使うから、つい連想が飛ぶ。

④の歌の「ともしひのいろ」には寛ぎの底に一抹の寂しさが覗く。大正十三年（1924）に輝子夫人が病没されてから、未だ幼い

一子富美子さんとの夕餉である。

⑤の歌、連作として時系列で読んでいけば④の歌とあとさきになつてゐるが、気にしない。ここでも重心は下句にあつて、夕風のすがしさに思わず帽子を取つたものだろう。これも村野家の広い屋敷内の光景だろう。

⑥の歌、ここでではもう翌朝になつてゐる。

下句から雨は今降つていないのだが、ひと雨くるともつと清潔しいのだが、という願望を込めた思いを詠んだもの。

次いで前歌壇合評を覗いてみよう。評者は杉浦翠子、矢代東村、穂積忠、村野次郎。・この人に誠はなしと知る時し誰かは敢へて争をせむ

（翠子）窪田さまは『善良な方』だと云ふ噂を聞いてゐます。私のやうな惡者ですと『この人に誠はなしと知る時しよいよ責めて立たざらしめむ』と作るところだつたでせう。歌として斯う云ふ梗概的の作を、ある幽玄に寂寥に導くと云ふのは容易な藝ではない。

（東村）僕はこの歌いいと思ふ。『誰かは』といつた所が少し考物だが。（忠）僕はこうした心持は素直に受け入れる事が出来るがそれ以上いい心持はしない。（次郎）私はこの一首を読んで大いに得るところがあつた。云ひたいだけ云つたと思はれる歌である。人は何と云はふと自分は自分だと云ふ境界にまで到達した人の作と思ふ。之に對して杉浦氏の改歌は、また極めて興味深い。これが所謂個性的の發露であつて、短歌と云ふものに益々愛着を覚えさせられる。